主体性の出発点

私の三男は中学校の国語の教師をしています。昨夜帰宅して私にこう尋ねました。

「音便(おんびん)って教えないといけない？僕自身、中学生の時に習った覚えがないし、日本人なら勝手にやってるから、そんなに重要ではないと思うけど……。」

一年生にはわからないでしょうから、わかるように説明しますね。日本語の動詞は、その下に付く単語や符号によって形が変わります。これを「活用」と言います。日本人はだれにも教えられていないのに、当たり前にこれをやっています。

「書く」という動詞でやってみましょう。下に付く単語は、「ない」「ます」「。(句点)」「とき」「ば」「。(命令)」「う」「た」の八つです。

「書かーない」「書きーます」「書くー。」「書くーとき」「書けーば」「書けー。」「書こーう」「書いーた」

このようになります。注意してほしいのはー線の付いた部分。見事に「かきくけこ」となっていますね。しかし、最後だけそうなっていません。ここは本来なら「書きーた」となるのですが、日本語の発音上、「き」ではなく、「い」となるのが普通です。(そのように変化することで、発音しやすくなります。)これを「音便」と言います。日本語を話す人ならだれでも自然にやっていることです。

同じように、「わかる」に「た」を付けると、「わかりーた」ではなく「わかっーた」。「読む」に「た」を付けると、「読みーた」ではなく「読んーだ」。これらも音便と言います。

彼の質問に、私はこう答えました。

「確かに、私の知る限りでは、音便がテストに出たことはないなあ。だからといって、教えなくてもいいということではないよ。これからは、どうして『書きーた』ではなく『書いーた』となるのか、と疑問がもてる生徒を育てることだよ。教えられたことを吸収することより、『なぜだろう』と疑問をもてるようにすることが大切だよ。」

皆さんはどうですか。日々の授業の中で、疑問に思うことや、更に追究してみたいと思うことはありますか。それが主体性の出発点だと私は思います。教えられたことを忠実に覚えて、テストでよい成績をとることだけがよしとされる時代は終わりました。これからは、自分で課題をみつけ、自分で追究しなければなりません。

私の高校時代の恩師の言葉です。今でもはっきりと覚えています。

「学校はな。上に行けば行くほど、自分から求めようとしない限り、何も身に付かないところだぞ。」

この言葉を思い出した今朝、ラーニングコモンズで数学のI教諭に質問する三年生の姿を見かけました。課題をみつけ、追究している姿に心が温まりました。

(十二月二十三日　記)